
袁家に栄光を！

三十畠紺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袁家に栄光を！

【Zコード】

Z5886Z

【作者名】

三十畠紺

【あらすじ】

セブテントリオンと悪魔の襲来によつて滅んだ福岡で、福岡の防衛を指揮していた一人である少女は無に飲まれる。

彼女が新たな生を受けたのは三国志の時代。袁家の当主である袁逢に拾われてからの能力を評価されて、袁家の当主を継ぐことになった彼女は、自分を支えてくれる人のため、そして何より自分のために乱世をかけることを決心し、雍州の地から暗躍し始める。

しかし、袁遺の生まれた三国志は、ただの三国志の時代ではなかつた。

セプテントリオンの出現によって狂いだした世界は、あらゆる人間を無に飲み込んできた。

結界に覆われていたはずの学園。ゲートで繋がっていたもう一つの世界。結界に守られた忘れられた者達の楽園。

あらゆる世界が交差する中、袁遺は激動の三国志を終結させるべく、袁家を背負つて動き出したのであった。

なんて設定の恋姫一次創作です。

主人公女性につき注意。

独自設定・解釈・「都合主義」あり。

一部キャラが性格が変わったりしていますので、「注意を。読み辛かつたり、ご都合主義が目立つたりと多々ある駄作になるとは思いますが、暖かい日で「らん」いただければ幸いです。

袁家の躍進（前書き）

新しく拙作を投稿させていただきます三十煙紺みそばたこんと申します。

拙作では御座いますが、お楽しみいただければ幸いです。

尚、拙作の主人公は女性ですが、華琳様と同類（それ以上
といつても過言ではありません）ですので、ガールズラブ要素が苦
手な方はご注意をお願いいたします。

また、純粧な恋姫小説ではなく、他作品のキャラも多く登場する
だけでなく、オリジナルキャラも大勢あります。

ところどころキャラ紹介などで補足していく予定ではありますが、
その点もご留意いただければと思います。

では、長くなりましたが、本編をどうぞ。
以後、よろしくお願ひいたします。

【福岡県／博多／マリンメッセ福岡】

審判の日から既に四日。東京・大阪・札幌・名古屋・博多・広島……。日本の主要都市から地方都市に至るまで、報道機関などを含めた、一般人が手に入れられる情報網は壊滅し、今までそこにあつたと奇跡のような日常が、儘くも崩れ去つた日から、既に四日が経過していた。

福岡のシンボルでもあつた福岡タワーが初日に倒れて以来、徐々に福岡県の面積が狭くなつてることを、一般人は知らなかつた。そもそも、戦う力のない一般人が、今まで生き残れる見込みはない。四日目ともなれば、生き残つている者は殆どが一般人の枠からは大きくはみ出していることを言つまでもない。

生き残つている人間は、もう数えるほどしかいない。ジップス福岡支局が手に入れた情報は、生存者の心をすたずたに引き裂いたと言つても過言ではないだろう。

札幌の生存者はゼロ。名古屋・大阪・東京は被害が甚大で、大分や広島にいたつては、既に地図には存在しない。日本海を隔てた先には、滅んだ大陸が寝転がつてゐるだけだ。福岡市内には、この世に存在するはずのない生物達が跳梁跋扈しており、屋内屋外を問わず、放置された一般人の亡骸が点々としている。

福岡は、正しく生き地獄になつてゐた。ジップス福岡支局を束ねていた臨時の支局長も、先の襲撃で命を落とし、暴徒と化していた福岡市の市民も、既に生き残りはない。マリンメッセ福岡まで撤退していく間にも、何人もの悪魔遣いがその命を散らしてゐた。

「……嘘でしょ？　ここまで来て袋小路だなんて……！」

マリンメツセ福岡の内部は、既に侵食が進んで半分以上が無に帰していった。入り口付近には、既に彼女をここまで追い詰めた悪魔が密集している。

全門の悪魔、後門の無。既に退路は無いに等しい。彼女の人生は、ここで積みなのだ。

「戻りなさい、ケルベロス、スレイプニル！……最後くらい、一緒に休みましょう？」

彼女をここまで守護してきた、彼女の使役する仲魔。ケルベロスとスレイプニルは、周囲を取り巻く悪魔共より強力なものではあるが、所詮、多勢に無勢であった。

流れに流れ着いて、風俗店で働いていた彼女ではあつたが、通っている大学も、この近辺ではトップレベルだったし、運動神経も通つていた高校で一位一位を争っていた。だからこそ理解できるのだ。これを覆す手立ては無い、と。

「さよなら、福岡県。さよなら、この……世界」

そして彼女は、無に向かつて倒れこんだ。無は無常にも彼女を飲み込んでいく。後に残つたのは、獲物を無くして帰つていく悪魔の残党と、無音の空間のみである。

奇しくも、次の日にはジップス東京支局から何人かが福岡に乗り込んでくることになつたのだが……。四日目の段階で、福岡県は壊滅した。

ジップス福岡支局を、ひいては福岡の防衛を一途に託されていた天才大学生の死をもつてして。

無人の廃墟も、やがては無の空間に飲み込まれることだろう。そのほかの地域と同様に。

【洛陽】

袁逢が、身元不明の幼子を拾つてきたのは、彼女の第一子である袁術が生まれる数年前の出来事だった。

当時、幼子の周りには、気品の高そうな白馬と、獰猛そうな番犬が佇んでおり、周囲には、幼子をかどわかそうとしたのであらう賊の遺体が転がっていた。

袁逢はそれを天命として捉え、害意が無いことを番犬に示しながら、幼子を屋敷に連れ戻った。袁逢の後ろには、馬と犬が、ぴったりと着いて來たのである。

それ以来袁逢は、幼子に袁遺と名付けると、実の娘である袁術の姉として、大事に育ててきたのである。成長するに従つて、袁遺の才覚は開花し、名実ともに袁家の時期当主となることは、誰の目にも明らかになつていた。

「袁遺様。この度は、袁家当主就任、本当におめでとうございます。董家を代表して、お祝い申し上げます」

「……袁遺様。曹家としても、曹孟德としても、心よりのお祝いを申し上げます」

「月も、華琳も、仰々しいわね。普段からの付き合いなんだから、もっと軟らかくしてもらつて構わないのに」

洛陽にある袁遺の屋敷では、袁逢から袁遺に、袁家当主の座の引継ぎが行われていた。参列するは、袁遺と関係の深い董卓や曹操、遠くは西涼の馬騰や幽州の公孫賛、南陽の孫堅とそぞうたる顔ぶれである。皇帝の直属の部下も参列し、大將軍たる何進も、祝いの席には参加していた。それ以外の面子では、名門と言われる家のうち、荀家、司馬家、陸家が参列していた。水鏡文学院を筆頭に、名

だたる私塾もこの祝いの席に参加することになり、袁遺の屋敷は久方ぶりに、異常な賑わいを見せていました。

とはいえ、袁家が如何に名門であろうと、これほどに大規模な祝宴が行われることは無かつたことだろう。

雍州の刺史に任命されることとなつた袁遺に取り入り、あわよくば良い関係を掘もうとする人間も多く存在していた。袁家の当主といえば、その莫大な財産と兵力で、都の中核を担つていふことになるだろうことは誰からでも明らかのことであった。

袁遺を拾つてきてからと言うもの、袁家の株は上昇しかしてない。まだ幼かつた頃の袁遺の献策は、大人である袁逢を唸らせ、国の政治を良い方向へと導いていたのだ。

「……はあ、雍州の刺史か。と言つても、私の直属の部下なんて、妹の美羽と付き人の七乃くらいなんだけ……」

その一方で、雍州の刺史に任命された袁遺には、直属の部下は余り多くはない。田豊や顏良、文醜、審配などの袁家に仕える者は、冀州に務めることになる、従妹の袁紹についていくものが多い。彼女達も、袁紹よりは袁遺に仕えたいと思うが、元当主からの厳命では背く事も出来なかつた。袁遺自身も、袁紹一人で冀州を任せようものなら、冀州が滅びてしまうのではないか、と考える人間の為、早い段階で納得していた。

「……人材登用だけ考えないとね。月は私に下るそつだから、彼女達にも働いてもらつとして」

袁遺にとつて、目下の課題は、人材不足である。給金はいくらでも払えるが、払う相手がいないのでは意味がない。そういったことも考えて、今回、袁逢と袁遺は、ここまで大規模な祝宴を開いたのである。

その結果は、大成功の一言に尽きるだらうか。

「荀家より、荀?と申します。人材をお求めのことですでの、是非、娘をお使いください」

「私は司馬防と申します。この娘を、どうかお使い願いたいのです」

「陸家の陸駿と申します。是非、娘の智をお役立てください」

「水鏡先生の下で勉学に励みました、諸葛亮と申します。どうか、私を末席に加えてはいただけないでしょうか? ……あう、噛んじゃつた……」

袁遺が今回の祝宴で雇つた人物は、以上の四人であつたりする。仕える相手こそ異なれど、その全てが、天下に名を轟かせるほどの人物である。しかも、刺史という立場上、不足することが許されない文官である。彼女は、四人が自己紹介を終えるとともに、採用の旨を伝え、曹操、孫堅、馬騰とは相互協力の関係を結ぶこととなつた。

公孫賛は、袁逢からの必死の頼みで、袁紹と協力していくことが決まったのである。

【雍州・天水】

先の祝宴から一週間、袁遺と董卓の一団は、雍州を治める為の政庁が存在している天水にやつきていた。長安や天水は、董家が治めていただけあって、比較的治安も良いが、西涼の馬騰と同様に、異民族の侵攻が多くある地域であった。

「ここ」の地域は羌族の侵攻が多いわ。特に、羌の都市と隣接しているここ、天水は最前線といつても過言ではないわ

「羌族は、悪い奴らじやないんやけどね……。ただ、羌方面での旱魃が原因での不作が原因で、狼藉の為に侵攻するのが多いみたいや

な

「実際、天水の西ではそれなりの被害が出ています。至急の対策が必要なのですが、私ではどうにもなりませんでした……」

刺史である袁遺の直属の部下になる、天水の太守である董卓との配下。彼女達を含めて袁遺の配下は優秀どころが集まっていた。武官には、元董卓軍の張遼、華雄、呂布。文官や軍師には、張勲、諸葛亮、司馬懿、荀?、陸遜と董卓、賈駆、陳宮。武官が少々心もとないわけだが、それぞれが一騎当千の働きをする武官である。それに加え、文官が少ない西涼の馬家とは相互同盟を結んでいた為、足りない武官を馬家から、文官を袁家から補充しあうことで人材不足を解決していた。

「……取り敢えず、区画整理と戸籍、農業の充実は必須ね。特に、馬だけでなく家畜も含めて…… そうね、混合農業を発達させましょうか」

「区画整理や戸籍は理解できますが、混合農業と言つのは……?」「畜産と農業を組み合わせることよ。飼料作物の栽培も可能でしょ?」

到着早々に内政に着手し始めた袁遺は、董卓と賈駆、陳宮には区画整理と警備隊の再編。荀?と陸遜には、混合農業を発達する為の下準備として、現状の農業収支報告書の作成。張勲には天水の戸籍作成を命じ、司馬懿には人材登用を命じた。天水は彼女にとつてもお膝元にあたる為に政務が滞ることは無いが、長安と安定には、別の人材を送つて政務に当たらせる必要がある。異民族の来襲や刺史としての政務を行う為には、元董卓軍のメンバーや新規参入組の文官を送り込むことは、現状の段階では出来ないのである。

「霞、天水の常備軍の調練を進めなさい。異民族以外にも対応でき

るよう、騎馬隊を増やすから、優秀な兵士を将に抜擢すること。

恋は「兵隊の調練を進めること。副官には、あなたが優秀だと思う

兵を抜擢しなさい」

「任せとき！」

「……分かった」

武官の張遼と呂布には、この地域の主力となり得る騎馬隊と、その騎馬隊に対応できる「兵隊を中心に調練を進めさせる。更に、兵士の中にいる優秀な人材を将として取り立て、将の層に厚みを持たせる必要がある。

曹操こと華琳とは、友好的な関係を築いてはいるものの、袁家は最終的に曹操に滅ぼされる可能性がある。彼女よりも強力な軍を、徐々に作っていかなければいけないだろう。

何より、ライバルである彼女に負けたくないという、個人的な理由もあつたのだが。

「……お嬢様、私達はどうすればよろしいのでしゅか？」

「大丈夫、あなた達には私の補佐と護衛を頼むわ。孔明、武官・文官の登用試験を行うから、天水、長安、安定……それと、羌にもその情報を流しなさい。これから時代、異民族だからと蔑む時代は終わっているわ。優秀な人材に、身分は関係ないわ」

「御意！ すぐに準備を行います！」

諸葛亮を動かして、一斉試験の準備を行わせている間にも、袁遺には色々とあることがある。都市内部の警邏、都市内での陳情処理。都市内部を歩き回ることで気付くことが出来る問題もある。汝南にいるときに擦り寄ってきた周りの人間が私腹を肥やすことにしか興味がないような連中であったが故に、袁遺にはその辺りはよく理解できているのである。

そして、そのような環境にあつたが故に、彼女は人の心に敏感で

あつた。先に雇つた四軍師が彼女に信服を誓つてゐるわけではないことも、とうに気付いていたのである。

だからこそ、彼女は四人に見せ付けなくてはいけない。彼女が仕えるに値する主であるということを。

「お嬢様、この天水の街を見て、どうお考えになられますか？」

「月が治めていただけあってしつかりしてゐるわ。ただ、少しだけ活気が足りないわね」

「……異民族、でしようか？」

「いいえ、怖いのは異民族ではないわ。……恐ろしいのは、侵略者漢民族も異民族も、等しく民には違ひないでしょ？」「…

警邏の途中で自身の身辺警護を行つてゐる華雄に尋ねられた袁遺は、あつさりとそう答えてのけた。彼女の出身は異民族だそうで、貴賤を問わない董卓が、その実力を見込んで登用した将である。だからこそ、彼女には袁遺の言葉が嬉しかつたのである。

「月様にも託してはおりますが、私の真名、葉をお預けします。……ですが、公式の場などでは何時も通り、華雄とお呼びください」「……分かつたわ。私の真名は天音。好きに呼んでもらつて構わないわ。それと……無理して敬語を使わなくても構わないわよ？」

「そつは参りません！ 月様が忠誠を尽くすお相手です。この私が敬語を使わない道理などありませんので！」

嬉しそうに応える華雄に、袁遺はそれ以上何も言つことはなかつた。

天水に、ひいては中華大陸を巻き込む暗雲は、未だ立ち込めたばかりである。

世間を賑わす天の御遣いの噂。そして、終末の予言。警邏による収穫はあつたと、袁遺はどことなく浮かない顔で政庁へと戻つてい

つた。手には、かつて使っていた、今では動かない携帯電話。ケルベロスとスレイプニールを連れている彼女には、確信があった。
いつか、これをもう一度使うことになるだろう、と。

袁家の躍進（後書き）

初っ端から人材チートと思われるかもしれません、この時代に現れている他の将を考えると、これでもチートになつていないと申し上げておきます。

主人公である袁遺（伯業）ですが、転生者であるが故に未来の知識を持つていますが、そのアドバンテージもそこまで長くは持ちません。

他の転生者はどんな人材がいるのか。次話では、幻想郷からの転生者を数名紹介いたします。

それでは、また次回にお会いできれば幸いです。

袁遺に仕える者の思惑

【雍州・天水・練兵場・毎週】

天水の練兵場では、馬家から派遣された武官の一人である馬岱が袁遺と打ち合っているところだった。呂布や張遼、華雄に呂布の抜擢してきた將軍でもある高順などでは袁遺の打ち合いで相手には強すぎる為に、馬岱との打ち合いを優先していた。

馬岱としても、馬騰や馬超などが相手では満足に打ち合ひ「」とも出来ない為に、渡りに綱であった。

「つ、お義姉様つてば、どうして傘なんかでたんぽぽと打ち合ふるのや……」

「この傘は特注……つてことらしいからね。どこかで見たこともあるものだから、この前行商人から買つたのよ」

「傘は武器じゃないのに……」

そんな馬岱にとって、一つだけ不満な点を上げるとすれば、袁遺の得物がややピンクがかって、白色を基調とした傘である、ということだ。その姿も相まって、袁遺が傘を差して佇む姿は、さながら深窓の令嬢に見えることだろう。

そんな、本来であれば武器に向いていない傘で、自身の得物である片鎌槍と打ち合わせられるのは、少しばかり不条理に感じるものだった。

ついでに言えば、袁遺の傘は、この時代にしては珍しく、骨組が鉄で出来ており、布がその表面を覆っていた。だというのに、自身の武器が布の一枚も破れないというのが馬岱にとっては信じられないかった。

「「」のままじや、たんぽぽだけ置いてけぼり食ひりうちやうんじやないの？」

「そんなことないわよ。私は蒲公英が馬超のようになりたいのなら協力するし、馬超とは違った形で活躍したいのならば、それに見合つた戦場を用意するだけよ」

「お姉様みたいな筋にはなりたくないな……。まつ、たんぽぽはお義姉様の副官をやっているのが一番楽しいからいいんだけどね」

そんな馬岱が、天水の練兵場で打ち合っていた理由は、それであつた。侵略を行う異民族の掃討作戦で、馬家と袁家は共同戦線を張るにあたり、先遣隊の一人として、馬岱が派遣されたのだ。馬家の主力は、馬騰や馬超、それに？徳である。馬岱は予てより馬超の隊の副官を務めていたが、今回は大規模戦略に加え、袁家の軍師が副官と入ることが決まつていった為、隊にあぶれていたのである。

袁遺は、馬岱のことを、知恵の回る智将の素質があると見ていた。諸葛亮や陸遜、司馬懿との知恵比べを行わせてみたときでさえ、受ける被害をできつる限り少なくしていただけだ。馬岱からしたら、惨敗もいいところだから褒められることもないと考えていたようだが、袁遺や諸葛亮は、その才を見落としあなかつた。

袁遺隊の従軍軍師である諸葛亮だけでは、戦場全体をもカバーする必要がある状態では、上手く隊を纏め上げることが出来ないのも、また事実であつたがため、馬岱を教育して、副官として育て上げてしまつゝこと。それが、諸葛亮と袁遺の思惑であつた。

「……今日の鍛錬は以上でお終いにするわ。近いうちに、羌族の侵略部落への侵攻戦が行われる。それまで、今まで以上に厳しい調練を賭すわ。誰の為でもない、自分のために。自分が生き残る為に、今の苦労は甘んじて受ける」と。それが出来る者は、長生きできるはずだわ」

袁遺は、さきほどまで得物にしていた傘を日傘として使用しつつ、優雅な仕草で兵へと語りかける。副官である馬岱もまた、袁遺と並び立ち、得物の片鎌槍を地面に刺す。

「蒲公英、あなたからみて、今日の調練で一番の動きを見せていた隊はどうだったかしら?」

「3番隊だったよ、お義姉様」

「……なら、3番隊にはこれを支給するわ。城下で使える割引券をね」

これには、袁遺隊の面々から歓声があがる。それもそうだらう。袁家軍では、各隊で一番の動きをしたものに、時折特別褒美ができるのである。

城下の商店には袁家から毎月の収入を納める代わりに、特別割引券を持つものには、一枚につき10%の割引として使用できるようしている。その用途は書物や食事以外に、武器、鍛冶、酒屋とあらゆるところに及んでいるのも、兵士のやる気を引き上げるために役かつっていた。

それに加えて、この政策は割引を強要されるはずの商人からの人気も高かった。彼らにしてみれば、割引を行っても利益が出るだけの収入を得られるだけでなく、袁家という巨大な名家とのつながりをも持つことができるのである。商売も活性化をするだけでなく、なじみの深い将兵は、時折用心棒代わりに勤めてくれることもあった。

いつして将兵と庶民のつながりが深くなることによつて、警邏中の庶民からの差し入れも見えるようになつていて、困つていていた庶民へ、将兵が無償で、進んで手助けをするようになつていていた。

天水は、ひいては雍州は、この大陸で最も住みやすい街である、などという噂は、瞬く間に広がり、太守による圧政に苦しんでいる民は、新天地を求めて移民を始める始末であった。

「それじゃ、蒲公英。今日も街で食事にしましょうか」

「うん、お義姉様！」

「まつ、待つてください、伯業様！ 私も、わたしゅもお匂いはんにするのでしゅ！」

「置いていかないから、少し落ち着きなさい。お城の前で落ち合いましょうか。蒲公英も孔明も、それでいいかしら？」

「はいっ！」

大陸の恵まれない人々が、自由に過ぐせる新天地。庶民からは最も離れているはずの、名門袁家の当主・袁遺と天水・雍州の民の距離はきわめて小さいものである。

民の平和と生活を守る「君でありながら、夢想家ではなく、現実をしつかりとわきまえる。高官や他の地域の太守の話だけに限らず、貴賤を問わず真摯に意見を受け止めるその姿勢。その辺りが、袁遺の魅力なのだと、諸葛亮は考察する。

優秀だが苛烈な曹操や孫堅。家柄だけで、実体の伴わない袁紹。治世は得意だが猜疑心の強い劉表。いずれも、確かに一角の勢力になるであろう存在ではあるが、諸葛亮の目指す天下を為すには、袁遺に仕えるのが一番の道であると、諸葛亮は最近になつて思つようになつていた。彼女こそが、自身の描いた理想の君主なのである、と。

私も彼女の魅力に中てられたのか、と諸葛亮は苦笑を浮かべるが、ここが心地よいのもまた事実。

諸葛亮には、一つ大きな確信があつた。やがて、大陸は巨大な乱世に巻き込まれる。だからこそ、自身の夢を体現してくれる主に仕えたいと思っていたのだ。その点、袁遺は申し分ない存在だった。

諸葛亮の目指す世界と、袁遺の目指す世界は、どこか重なっているのだ。

「あ、そうだったわ。孔明、これ……、今月の新刊よ」

「あ、ありがとうございます！」

……決して、諸葛亮は、袁遺の著している艶本につられたわけではないのである。

【雍州・天水・農業区域・昼過ぎ】

荀？と陸遜は、袁遺の命令の元、天水外れにある農村地区を訪れていた。文官一人で行動をするわけにもいかない為、彼女達の護衛をしている呂布とともに、である。

「……小麦を栽培する面積を増やしたといふ、こんなにも変わるものなのね」

「最近では、羌族の一部がこちらに移住して、混合農業を始めていますね~」

「そのお陰で、羌の一部の部族からは馬も購入でき、軍の層も厚くなつた。それに加えて、税収も安定化……か」

「流石は、袁家の再興の象徴ですね~。正直、伯業さんの能力を見くびっていました~」

王佐の才と、後の呉の大都督は揃つて感想を漏らしていた。確かに、以前から混合農業に近い農業形態は、一部農村で実施されていた。しかし、家畜の排泄物を肥料として用いたりするやり方は、当初は反対派が多数だつた方法ではあるが、今年の豊作を喜んだ多くの農村で取り入れられていた。

それに加えて、袁遺が提示した連作障害の情報も、多くの農村でそのまま受け入れられた。連作障害については、その成果の如何が出るのはまだ先の話になるだろうが、過去のデータから、間違いではないことを彼らは経験として知っていた。

「作付け面積からの税収ではなく、土地を単価として見たときの税収だなんて、普通は考え付かないわよ」

「いえ、それは違いますよ、文若さん。私達はあ、思いついたとしても、それを行動に移せないんですよ～？ 過去にそういう事例がありませんから～」

「……確かに、普通は年毎に必要な分を取り立てるものね」

農業面以外で、荀？と陸遜を唸らせたのは、税の徴収方法である。後の日本で行われる地租改正と同様に、土地に税をかけて、一定の税収を得るとともに、消費税として、通常の商品に対して、5%値段を上乗せさせることとしたのだ。

最初こそ、小さな混乱が続いたものだが、値段が一本化されれば、直ぐに民衆もそれになれる。後は、月の最後に、売り上げの5%を国に納税されることで、庶民からの税としたのである。

「消費税って言つてたわね……。兵や將軍、私達のような文官や軍師、更には伯業様ですらも、ものを買つときには税を納める……。伯言はどう思つた？」

「多分、文若さんと同じだと思いますよ～？ 庶民からお偉いさんまで同じルールで税を納めているのだから、文句も出ませんし……、税収が安定したことで生活も向上するわけですから、不満がたまることもないはずですよ～」

「……確かに、ここまで治世の器を見せ付けられると、もつとその治世を見てみたい、って思つわよね」

袁遺は、董卓に命じて、信頼できる政務官を税収調査の職に任じ、粉飾を行つてゐる店がないかどうかの調査を行わせ、警邏隊にはそれに伴う問題がないかどうかをチェックさせてゐる。今後、文官が増えれば所得税などを追加して税収を増やし、より高度な政策へと

シフトさせていく予定なのである。

職業紹介所の設置、町役場の設置など、袁遺はかつての知識の一部を駆使しつつ、出来うる限り過^ごじし易い都市を目指していたのである。

そのいずれの政策も、この時代に過^ごす文官であれば、田から鱗の政策である。そして、優秀であるが故に、彼女たちは思つのだ。もつと、新しい政策を見てみたい、と。

「伯言は、このまま袁家でお世話になるつもり？」

「孫堅様からも勧誘の面をいただいてはいますけれども、此方の方が私にはいい環境ですね～」

「……理由を聞いても？」

「簡単なことですよ～。私としても、袁遺様の目指す国を見てみたいたいというのが一つ。環境面では、『必要な書物があれば、袁家が無償で調達する』という点が、流石は名門だと思いますね～」

「……図書館では、例の性癖があるからってところね」

「お恥ずかしながら。……なので、必要な書物に関しては、自室で保管しても良いなんて好条件を出していくだけると、気兼ねもりませんし、何よりも……私の能力をとても高く評価していただいているようで、嬉しいんですよね～」

陸遜が袁家に高評価を持っているのは、それが理由であつたりもする。江東の虎と恐れられる孫堅の下にも周瑜がいるが、袁遺が諸葛亮、陸遜、荀?、司馬懿などの筆頭文官、軍師、將軍職に与えている特権は非常に大きい。

仕事に必要な物であれば、何でも無償で手に入れてのける点でも、それは理解できるだらう。天水には当然、図書館も存在するのだが、そこにある書物であつても、彼女達が欲しがれば[写本を即座に作らせ、一人につき一冊行き渡る]ようにしているのだ。

それに加え、陸遜は自身の特殊な性癖を、袁遺に受け入れられて

いると言つのも大きかつた。

以前に袁遺が陸遜の部屋を訪れたときに、発情していた陸遜は主である袁遺を欲望のままに襲つてしまつたことがある。結局、攻守は逆転したわけだが、袁遺は陸遜のその性癖をも受け入れた過去がある。

陸遜としても、『性癖一つであなたを追放して、何の得があるのかしら？ あなたほどの優秀な人材だったら、他の何を代償にしても手元に置いておきたいわ』などと言わされれば、満更ではないのである。

「そういう文若さんは、袁家から出奔するつもりなのですか？」

「元々、陳留の曹操様を主に立てようと思つていたんだけどね。河北袁家に仕えていたら、間違いなく出奔していたんだけど……」

「今は出奔するつもりはない、ということですか？」

「伯業様に『我が子房』とまで称されでは、嬉しくないはずがないでしょ？」

「前漢の張良になぞらえて、ですか？ それは、私も言われてみたい言葉ですね～」

荀？が袁遺に言われた言葉は、彼女の心を掴んで離さなかつた。元々、同性愛の氣がある荀？は、その筋でも有名な曹操への推挙状を、曹操の親友でもある袁遺に書いてもらう予定であつたのだ。

しかし、袁遺は荀？の想像以上に、自身の理想に近かつた。曹操であれば、自身を様々な意味で可愛がってくれることは簡単に予想がついたのだったが、袁遺がその上を行くとは思つていなかつたのである。

袁遺が天水に居城を構えてから数カ月後、曹操が袁遺を訪れた際に、荀？は曹操に美味しくいただかれたことがあつた。その際に、袁遺には手を出したのか、と荀？は曹操に尋ねたことがある。荀？との情事の際には、曹操のサディストっぷりが、受け気質な荀？に

は眩しいほどだつたのだ。

しかし、曹操が返したのは荀の想像だにしない事実だつた。曰く、『私が手を出したんぢやないわ。誘つたのは私だけど、襲つてきたのは天音』と、顔を赤らめて教えてくれたのだ。

「……伯業様あ、今日も私を激しく襲つていただけないでしょかあ～」

「私も大概だとは思いますが、文若さんも、性癖は大概ですよねえ……」

曹操の上を行くという袁遺との情事を想像して、体をくねらす荀？を見て、陸遜は一つだけ大きな溜息を漏らす。

隠れて艶本を好んでいる諸葛亮。本に欲情してしまつ陸遜。一日の終わりに、袁遺の足を舐めさせてもらつている荀？。

この軍にはまともな文官つていなかと、陸遜は自分を棚にあげて思つたりしてしまう。

だが、一つだけいえるだらう。大義や人望など惹かれる部分も多いが、結局最後に物を言つるのは、自身の欲なのである。仕えるべき主は、自分の目でしつかりと選ぶ。それは即ち、自身の望む主君像を、欲望のままに選択すると言つことなのだから。

……つまり、陸遜も苟？も、色事を優先させたわけではないのである。

【雍州・天水・会議場・夕刻】

「お姉ちゃん、天音様からお願ひされた仕事つて……？」

「何でも、悪徳官吏の一斉摘発を行うらしいですよ？ 地盤を固めて一年経つた今、摘発を行つても、政務に問題がないレベルまで持つてきましたから」

「ふーん……。でも、お姉ちゃん？ 司馬懿は横文字を喋らないはずだよ？」

「……そうでしたね。もう数十年も経つというのに、未だに慣れませんね」

司馬懿と、司馬懿によつて推挙されたその妹の司馬孚は、天水の会議場を訪れていた。将の登用を命じられた司馬懿は、郭淮、鍾会、？艾などを登用しており、諸葛亮には、天水の学問所で学んでいた姜維を弟子入りさせている。

一通り文官と武官の補充に成功した司馬懿に、袁遺は悪徳官吏の一掃を命じたのである。その理由は、司馬懿の秘密にある。

「小石、官吏の心を読むのは私がやります。あなたは、私の様子を見てリストを作成しなさい」

「うん、お姉ちゃん。私達の秘密を知つても変わらずに接してくれる天音様の為にも、失敗できないからね」

「……そうですね。心を読むことが出来る私達を知つても、迫害もせずに傍に置いてくれている。一族からも厄介者にされた私達を…。それだけでも、天音様には感謝しないといけませんね」

「昔は、人間からも、妖怪からも迫害されて、地下に逃げ込む破目になつたのにね。もつと前に、天音様に出会いたかったなあ。そうすれば、私も第三の目を閉じなくとも良かつたのに」

「でも、その代わりにあなたにしかできないことも生まれたじゃないですか。だつたら、今の力を持つて、天音様を支えなければいけませんよ？」

司馬懿と司馬孚は他の人と比べて特殊な能力を持つてゐる。姉の司馬懿は、人の心を読む読心力を、妹の司馬孚は、他人の無意識の隙間に入り込み、自身の存在を気付かせなくする能力を。

特に、司馬懿の持つ読心力は、他人には非常に疎まれる能力であ

つた。その能力ゆえに疎まれ、一族でも厄介者扱いだつた一人は、初めてその力をも認めてくれた袁遺には、当然のことながら真名を許している。同時期に加入した四人組の中で、最も早く、袁家に骨を埋める覚悟を決めたのである。

司馬懿、その真名を覚。司馬孚、その真名を小石。

かつては、幻想郷で地下の邸宅、地靈殿に居を構えていた妖怪、古明地姉妹である。

「幻想郷の滅亡は呆氣なかつたけれども、人生悪いことばかりじゃないんだね」

小石が言うように、幻想郷は既に滅亡していた。と言うよりも、彼女達は転生したに過ぎないのだ。日本を、世界を蝕んでいたセプテントリオンによる侵攻は、結界によつて隠された幻想郷をも飲み込んだ。幻想郷の龍脈の中心となつている場所を、全て失つたことが原因である。

紅魔館、白玉楼、永遠亭、守屋神社、明蓮寺、地靈殿、天界、そして博麗神社。幻想郷の強者達は、セプテントリオンと暴れまわる悪魔に敗北し、やがて、結界もろとも無に飲み込まれてしまつたのである。

司馬懿と司馬孚……、かつてのさとりとこいしは、地靈殿の防衛線で無に飲まれ、やがて袁遺と同様に、この世界へと転生したのである。その能力はそのままにして。

そして、彼女達にとつて救いであつたのは、さとりもこいしも、妖怪としての恩恵があまりなかつたことである。吸血鬼だったものが人間となれば、慣れるまでに時間がかかると言うものだが、彼女達さとりの妖怪は、特異な身体能力を持つていてもなく、人の心を読むことが出来ること意外は、人間と同じだつたのである。

だから、転生した彼女達の、此度の生が人間であつたとしても、そこに何の不自由もなかつたのだ。

「覚様」？ 事前情報は必要だと思いましたので、私と羽立とで集めておきましたよ？」

「文が現場を、私が念写で証拠を……ってことよ。天音様の夢を支えるつて決めたからには、これぐらいのことはこなさないとね」

「お疲れ様、文、羽立。これで一斉摘発が出来るわね」

会議場へと向かう司馬姉妹を呼び止めたのは、馬隆と賈充の二人であった。馬隆、その真名を文という少女と、賈充、その真名を羽立という少女は、長安の寺子屋にいた書生であった。長安から安定、天水に至るまで、彼女達の記したゴシップ竹簡が見受けられるほど、その筋では有名な少女達だったのである。

その一人が、こうして袁家に身を寄せているのも、偏に、覚との関係が知己であつたことにある。馬隆と賈充の一人もまた、かつての幻想郷の住民であったのだ。

かつての射命丸文と姫海棠はたては、この世界でもまた、新聞記者としてその名を上げながらも、自身らの新聞をそこそこ高く評価し、スポンサーについてくれている袁遺には頭が上がらないのである。

そこで、袁遺に交換条件で出されたのが、袁家で働くことである。袁家で働いている間、あらゆる特権を認めるほどの好条件に、馬隆と賈充は飛びついたのだ。

袁遺にも、当然思惑がある。袁遺は、戦争を制するのは情報だと知っていたのだ。だからこそ、情報戦で有利に立つ為に、彼女達の力が必要であったのだ。

「……それでも、雲行きが悪いですね。一雨来そうですから、空を飛んでは帰れませんね」

「ええ、本当に。まあ、これから雨が降りそだと思っているのに、何人かを外へと放逐するのですから、私達は鬼なのかもしません

ね

「そんなの、天音様の邪魔を……といふか、今まで悪いことしてきてるんだから、当然の報いだつて。お姉ちゃんが責任を感じる必要はないんじゃないの？」

「そうね、小石の言う通りかもしれないわね。……あら、雨も降ってきたわ。これは、私に『心を鬼にして職務を全うし、悪徳官吏を放逐しろ』って啓示かもしれないわ」

会議室の入り口まで、他愛もない会話をしながら、廊下を歩いている司馬姉妹と賈充。窓から覗く夕刻の空は、厚い雲に覆われ、徐々に天気が崩れていることを確かめさせる。やがて、小雨だつた天候は、大雨へと変わり、雷を伴い始め、強風が吹き始めた。

賈充は、早々に窓から飛び去った馬隆に、心中で『ご愁傷様』と手を合わせる。こんな天候では、びしょ濡れになつて雨宿りをしている頃だらう。いくら、風を操る能力があつたとしても、この悪天候の前ではどうにもならないだらう。空を飛ぶ為に維持している能力を、他に回すことはできないのだ。

「それじゃ、私もお暇させてもらおうかしら。……っと、伝え忘れるところだつたわ」

リストを渡して部屋に戻るとしていた賈充が、何かを思い出したかのように声をあげた。賈充と馬隆は、悪徳官吏のリストアップとは別に、『幻想郷の住人』を探していたのである。殆どは転生してこの世界に居るようであつたが、中々見つからずに難儀していたのだ。

人材登用を袁遺に任せている司馬姉妹には、昔のつながりが非常に大きい。

「益州方面に河童の所在あり。それを差し引いても、益州方面への

介入は悪くない……か

「益州方面では、劉焉が寝込んでいる間に娘が悪政を敷き始め、家臣団からも不満が出ているみたいだし」

司馬懿は、賈充の渡した益州方面の報告書に目を通して、賈充へとその内容を確認する。益州方面は世が乱れ、国中の至る場所で農民反乱の気が見受けられるようになっていた。

袁家は、民からの支持も高い。いずれ来る戦乱の世を制するためにも、益州方面への介入を筆頭軍師に相談してみるべきか。司馬懿は思案を開始しながらも、悪徳官吏の一斉摘発を行う為に、部屋へと入つていく。

それを見送った賈充は、のんびりとした歩調で、ゆっくりと自室へと帰つていった。

袁遺に仕える者の思惑（後書き）

さて、今話では袁遺に新しく使えるようになった面々の思惑や袁遺への考えを詰め込んでみた拠点のようなお話になっています。

今後は、基本的に合戦と拠点といった内容で投稿していく事になるかと思います。

今話では、幻想郷からの転生組のうち、古明地姉妹と鳥天狗の二人組の所在と、該当する武将が明らかになりました。また、益州にいる河童といえば、そう彼女しかいませんね。

こんな感じで、三国武将の一部が転生者枠で埋まっていきますので、各軍に特殊な武将がいたり、合戦が特殊になつたりと色々登場することでしょう。

いわば、架空戦記もの。私は架空戦記物が大好きです。『三国志』とか信長の野望とか。私には動画は作れないでの、ならざりぢりで、なんて浅はかな考え方だつたりします。

さて、次回はまた別の作品からの転生者をお目見えすることになると思います。

それでは、また次回に会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5886z/>

袁家に栄光を！

2011年12月19日20時00分発行